Ⅱ　資産に含まれる文化財

1　整理表

A）構成資産

a	西三川砂金山	『今昔物語集』の説話に登場する佐渡最古の金山で、西三川川流域がその舞台であったと考えられる。寛正元年(1460)頃より再開発が行われ、井之神沢といった中世の砂金採掘地帯の地名も残る。江戸時代には幕府の管轄下におかれ、明治5年(1872)までの長期にわたり砂金採取が行われた。砂金山の中心であった笹川十八枚村には、現在も当時の集落状況を想起させる家並や中世建築と考えられる阿弥陀堂などの景観が残る。また、山を崩して流水により選鉱を行うための「大流し」と呼ばれる砂金採取の遺跡も良好に現存する。これは中国地方に発達した砂鉄採取法の「かんな流し」（水洗比重選鉱法）に類似し、技術の交流をうかがうことができる。

資産の構成		保護のための措置		面積(㎡)	解　　説
		主体	保護の種別 〈　〉は指定目標		
1	西三川砂金山	未	〈重要文化的景観〉		佐渡最古の金山で、平安時代末から中世にかけて断続的に砂金採取が行われ、寛正元年(1460)の再開発から江戸時代の幕府直営を経て、明治5年(1872)までの長期にわたり金が産出された。砂金山の中心地である笹川集落周辺には、大山祇神社や金山役宅跡、砂金稼ぎ場などが江戸時代の絵図のとおり現存しており、当時の鉱山集落の景観を連想させる。
2	法名院塚・荒神山	未	〈国史跡〉		法名院塚は、順徳上皇第三皇子彦成親王の墓といわれ、父の菩提のためにこの地に寺基を築いたという。荒神山は中世修験者が修行したと伝わる岩山である。彦成親王は阿弥陀如来を信仰しており、修験と結びついて、この笹川が中世以来の砂金稼ぎの舞台であった。
3	医王寺	未	〈国史跡〉		医王寺は西三川川の下流に位置する真言宗寺院で、寺伝では文保元年（1317）の開基といわれる。かつては蓮華峰寺の末寺で、明治初期までは笹川集落のほとんどの家が医王寺檀家であり、砂金山と関係の深い寺院である。付近には同じ蓮華峰寺末寺の安楽寺と、同門徒の福寿院があった。
4	赤泊から笹川へ至る旧道	未	〈国史跡〉		寛正元年（1460）の砂金山再開発には、尾張から赤泊の東三川に渡ってきた一向宗が関わっていたと考えられる。現在も、東三川から東光寺・滝平・黒山を経て西三川砂金山へ至る旧道が残っている。
5	砂金山群	未	〈国史跡〉		中世末から近世にかけての砂金稼ぎ場で、主に笹川集落周辺と西三川川流域に分布している。文禄2年（1593）以降、新たな岩盤掘削技術の導入によって、砂金山の山裾は大規模に掘り崩された。砂金山最大の稼ぎ場である虎丸山の中腹には、砂金採取のために山の斜面を崩した痕跡が江戸時代の絵図のとおりに残っている。
6	水路跡	未	〈国史跡〉		砂金を含む土石から余分な砂礫を洗い流す目的で水を引くために設けられた水路跡。戦国時代末期～江戸時代初期に、鶴子銀山や相川金銀山の山師※1が持ち込んだ水利技術が応用され、砂金山周辺には多くの水路が設けられた。このうち、山師味方但馬が開発したとされる延べ12kmに及ぶ水路を「金山江（きんざんえ）」という。
7	堤跡	未	〈国史跡〉		砂金含みの土石から余分な土砂を洗い流すための水を溜めておく受堤跡。堤の水を流すことを大流しといい、毎月25～26日までは大流しを行い、残りの4～5日間で砂金採りを行ったという。こういった水利技術の発達により、江戸時代以降砂金産出量は飛躍的に増大した。
8	石組遺構群	未	〈国史跡〉		笹川集落周辺に点在する、人頭大の自然礫をコの字状に積み上げた構造物で、現在49基の石組遺構が確認されている。用途は不明であるが、「鍛冶小屋」と書かれた建造物が描かれている絵図があり、砂金採取用具の修理のための鍛冶小屋に使用されたり、労働者の休憩所や砂金道具置場など、様々な用途に用いられたと考えられる。
9	金山役宅跡	未	〈国史跡〉		慶長8年（1603）、大久保長安による佐渡支配が始まると、西三川砂金山は長安の代官原土佐に預けられ、以後佐渡奉行所から派遣された西三川金山役2人が赴任して砂金山の支配が行われた。笹川集落内には、金山役の役所や屋敷があったと想定される平坦面や石垣が残る。

10	笹川城跡・西三川城跡	未	〈国史跡〉		笹川城跡は笹川集落の南西端に位置し、笹川を管轄する羽茂本間氏の出城であった。西三川城は、西三川川の下流、安楽寺跡付近にあり、羽茂本間氏の支城と考えられる。戦国期に羽茂本間氏の勢力が急速に伸びていく背景には、西三川砂金山の経営権を握り、大きな経済力をもっていたことがあげられる。
11	阿弥陀堂	未	〈国史跡〉		西三川小学校笹川分校裏に位置し、中世末から近世初頭にかけて建造されたと考えられる。何回かの改築の跡がうかがえるが、祭壇上部の虹梁には、中世の装飾とされる渦巻き紋様が施される。堂内に安置される阿弥陀如来像も中世末の様相を呈しており、中世から笹川に豊かな財力があったことを想起させる。
12	大山祇神社	未	〈国史跡〉		西三川砂金山の大盛り※2と安全を祈願して勧請された神社で、文禄3年（1594）の開基といわれる。金や銀という貴金属の持つ華やかな印象とは逆に、鉱山で働く人たちは常に落盤など事故の危険に直面していた。そのため鉱山労働者の間では独自の精神文化が伝承されていた。この神社は山嶽を司る大山祇命を祭神として祀っている。
13	金子勘三郎家	未	〈重要文化財〉		天明年間(1781～88)の建築とされる民家で、主屋を中心に土蔵・便所・納屋・牛納屋などの付属屋が良く残る。砂金山名主を務めた金子家の住宅であり、主要建物の外観は茅葺屋根及び白壁と黒の腰板で統一され、佐渡民家の特徴と美しさを今に伝えている。砂金山史上も貴重な建造物である。

b	**鶴子銀山**	天文11年(1542)から昭和21年(1946)まで稼働した銀山で、相川金銀山が開発されるまで佐渡最大の鉱山であり、主に銀・銅を産出した。鶴子沢・屏風沢・仕出喜沢などの沢や尾根筋に、大規模な露頭掘り※3跡や佐渡で初めての坑道掘りによる間歩※4などの採掘跡が広範囲に分布する。石見銀山から灰吹法※5と呼ばれる製錬※6技術や、文禄4年(1595)には、横相と呼ばれる坑道掘りの技法が伝えられたと考えられ、銀の産出量が急増した。なお、上杉氏の佐渡侵攻も鶴子など佐渡の金銀山掌握が目的であったといわれている。			
資産の構成		保護のための措置		面積(㎡)	解　　説
		主体	保護の種別 〈　〉は指定目標		
1	鶴子銀山	未	〈重要文化的景観〉		天文11年(1542)から昭和21年(1946)まで稼働した銀山で、相川金銀山が発見されるまでは佐渡最大の鉱山であり、主に銀・銅が採掘された。鶴子銀山の最盛期は、戦国時代末～江戸時代初期で、当時の繁栄の様子は「鶴子千軒」とたとえられた。
2	間歩・露頭掘り群	未	〈国史跡〉	849,300	鶴子銀山は主に銀・銅を産出した鉱山で、山中には、現在も鉱山初期の採掘方法である戦国時代の露頭掘り跡やひ押し掘り※7跡、江戸時代の坑道掘り跡などの採掘形態を示す遺構が数多く残されており、銀山における採掘方法の変遷を見ることができる。
3	鶴子代官屋敷跡	未	〈国史跡〉	7,000	上杉氏の銀山経営に伴い、天正17年（1589）に上杉氏の陣屋が置かれた場所。慶長8年（1603）に相川に陣屋が移転するまでの間、佐渡の金銀山を統括していた。現在も建物があったと想定される平坦面や沢を利用した空堀跡が残る。また「代官屋敷」「土居の内」など中世における武士の居館を連想させる地名も伝えられている。
4	鶴子田中遺跡	未	〈国史跡〉	45,300	戦国時代末から江戸時代にかけ田中清六等の代官の陣屋が置かれた地域で、陣屋の置かれた斉藤家には当時の古文書が残されている。干物や塩魚類などを販売取引する四十物町等の町屋もあり、相川金銀山の発見により相川へ陣屋が移転するまでの間、佐渡における鉱山町の中心であった。周辺には専得寺等の寺院や精錬※8のための床屋※9があった。
5	鶴子荒町遺跡	未	〈国史跡〉	17,800	戦国時代末から江戸時代の鉱山集落。鶴子銀山において鶴子田中遺跡に次ぐ第二の鉱山集落ともいうべき場所で、新町が荒町に転訛したもの。鶴子銀山跡・鶴子代官屋敷と鶴子田中遺跡を結ぶ鶴子道に沿って立地し、現在も中世的な様相を示す平坦面や井戸跡が残る。
6	鶴子床屋跡	未	〈国史跡〉	15,800	鶴子銀山の精錬所跡で、「かなくそ平」という地名が残る。慶長6年(1601)に佐渡代官であった河村彦左衛門と田中清六の両名による床屋管理の記録があり、隣接する斉藤家は、相川へ代官所が移転した後の陣屋跡と推定されている。幕末にはここで大砲鋳造が行われ、その際に用いられた砲身模様の鋳造技術が佐渡の蝋型鋳金技術へと発展した。

7	沢根城跡・沢根元城跡	未	〈国史跡〉		戦国時代に鶴子銀山を統治した沢根地頭代の沢根本間氏の居城。専得寺背後の段丘（沢根元城跡）から天険の地である海岸沿いの質場崖上（沢根城跡）に移転するが、いずれも鉱山・港の警備を目的としており、沢根市街地と沢根港を一望できる場所に立地する。天正16年(1588)以後、上杉氏代官の佐渡における番城となった。現在も郭跡・空堀跡等が残る。
8	鶴子道	未	〈国史跡〉		鶴子銀山と沢根の港町を結ぶ旧道で、現在も一部で山間部の集落と港湾をつなぐ道路として使用されている。沢根の集落には、集落間を横断する道路は無く、集落ごとに海と山をつなぐ縦長の道路が通っていることが特徴である。
9	古岩小滝参拝道	未	〈国史跡〉		鶴子銀山周辺の山々は、中世以来の山岳信仰の修行場として知られていた。東野集落から北上し、小滝・古岩といった修行場を通り、青野峠を経て金北山道に至る参拝道が現在もその姿をとどめている。
10	古岩・天狗岩・小滝	未	〈国史跡〉		鶴子銀山周辺には、中世に遡る修験に関する地名をもつ遺跡が数多く現存し、鉱山と修験者の関わりが推測される。東野集落の奥山に位置する古岩は、中世山岳修験の根拠地と推定され、堂宇が残る。天狗岩は鶴子代官屋敷跡北方に、また小滝は沢根炭屋町の三瀬川上流に位置し、修験者の修行場であった。古岩や小滝は現在も信仰の対象となっている。
11	長安寺・専得寺・吉祥寺跡	未	〈国史跡〉		鶴子銀山の開発に伴い、周辺には多くの寺院が建てられた。専得寺は天正年間の開基といわれ、旧寺地は鶴子にあったが、後に沢根の現在地に移転した。吉祥寺は山師秋田権右衛門によって西野に移築された寺院で、江戸時代には金北山神社や古岩の別当を務め、金銀山の祈願所でもあった。長安寺は天文年中の開基と伝わり、吉祥寺と合併して今に至る。
12	西野金北山神社	未	〈国史跡〉		社伝によれば天文18年（1549）の創建といわれる。かつては鶴子銀山に程近い屏風沢にあったが、その後山師秋田権右衛門によって現在の西野に移築された。例祭では鬼太鼓や能が奉納され、明治4年（1871）再建の拝殿は、中柱を抜くと演能可能な兼用能舞台となっている。
13	山師秋田権右衛門家の墓	未	〈国史跡〉		秋田氏一族は鶴子銀山を中心に活動した山師で、初代は寛永元年（1624）に秋田から佐渡へ渡り、屏風沢・仕出喜沢・松ヶ沢・百枚平一帯の銀山を開発し、吉祥寺や金北山神社を旧西五十里村に移築したという。2代目も弥十郎間歩や相川金銀山の間歩などで採掘を行ったことで有名である。一族の墓は金北山神社付近にあり、五輪塔や墓石が残っている。
14	沢根篭町善宝寺	市	有形文化財 〈国史跡〉		沢根篭町の小高い場所にある総鏡寺境内にある。港町であった沢根は、海上の安全を祈願する善宝寺信仰が篤く、かつては佐和田の海岸線伝いにこのような堂宇が7箇所あったが、当時の姿を留めるものは総鏡寺のもののみである。かつては日の入りとともに灯明があげられ、夜には灯台の役目をはたしたという。
15	沢根の町並	未	〈重要文化的景観〉		沢根は戦国期に鶴子銀山の銀鉱石や物資の積出港として発展した。廻船業を営む者も多く、鶴子銀山が不景気になると、相川の外港としての役割も果たすようになった。明治以降、両津夷－相川間の県道と、両津－新潟間の航路が開かれると次第に衰退し、明治末期にはほとんどの廻船問屋は店を閉じたが、当時の間取りを残した家屋が数多く現存している。

C	**新穂銀山**	天文12年(1543)以後まもなく開発されたと考えられる銀山で、「滝沢銀山」とも呼ばれた。江戸初期には、相川金銀山の大山師である味方但馬なども新穂銀山で銀の採掘を行い、慶長8年(1603)からは大久保長安による直山[※10]のもとで幕府による経営が行われたが、慶安2年(1649)の大盛りを最後に衰微した。なお、銀山の繁栄を受け、慶長5年(1600)に成立した新穂市町が、現在も新穂市街地として町並を残している。			
資産の構成		保護のための措置		面積(㎡)	解　　説
		主体	保護の種別 〈　〉は指定目標		
1	新穂銀山跡	未	〈国史跡〉	21,100	戦国時代、鶴子銀山に次ぐ規模の銀山で、その鉱山町は「滝沢千軒」といわれるほどの隆盛を誇ったが、慶安2年(1649)の大盛りを最後に衰微した。なお、現在の新穂市街地（新穂市町）は銀山の繁栄を受け、慶長5年(1600)に成立した町である。

2	滝沢集落跡	未	〈国史跡〉		新穂銀山に接する大野川上流にあった鉱山集落跡で、新穂銀山の隆盛に伴って形成されたと考えられる。現在でも大和屋敷、滝沢千軒、山の神の字名が残り、宅地跡と想定される平坦面が残る。
3	北方山城跡	未	〈国史跡〉		弘治2年(1556)の築城と伝わる山城で、滝沢銀山を守護する形で沢沿いに立地し、蛭河内城とも呼ばれた。山城であったため水が不足し、天正17年(1589)、上杉景勝による佐渡攻めの際、水があるかのように見せるため、山上から白米を白い滝のように流し落としたという伝説が残っている。
4	清水寺越え	未	〈国史跡〉		古くから国中地域と前浜方面とを結ぶ、小佐渡山地を横断する重要な山越え道のひとつ。大野から清水寺を通り、大野山・黄金山などを越え、柿野浦、東鵜島、岩首に至る。近世鉱山の盛時には多くの往来があった。
5	大日堂	県	有形文化財 〈重要文化財〉		大日堂は大日如来を安置する、享保3年(1718)再建の堂宇である。ここは牛の守護神でもあり、険しい山道で物資を運搬する鉱山では牛が使役されたことから、牛や牛飼いたちとの関係が深い。献納された絵馬は、鉱山へ牛を供出した海府方面からのものが非常に多い。
6	清水寺	未	〈重要文化財〉		真言宗寺院で、境内には京都清水寺の舞台を模したといわれる救世殿（観音堂・本尊は千手観音）があり、元和8年(1622)の建立である。寺院の前面に新穂銀山があり、「観音の合掌した御手先に大盛りの間歩がある」といった銀山に関する伝説も残されている。
7	新穂市町	未	〈重要文化的景観〉		中世末から近世初頭に栄えた新穂銀山への物資集積地や鉱山労働者の歓楽街として、慶長5年（1600）に成立した町。夷湊と畑野・新町方面を結ぶ道と、金井方面へ通じる道とが交わる交通の要衝として大いに賑わった。天保2年（1831）の記録には、130軒を超える商家が軒を連ねていたという。

d	**相川金銀山**	16世紀末から400年間稼働した日本最大の金銀山。平成元年(1989)までに、金77t、銀2,300t、銅5,410tを産出し、金の産出量では平成9年（1997）に菱刈鉱山が上回るまで国内第1位であった。また、16世紀にメキシコのパチューカ鉱山で開発されイスパニア人によって日本に伝えられた水銀アマルガム法※11、坑内排水のためのアルキメデスポンプ(水上輪)※12やスポイトの原理を応用したスポン桶※13といった技術など、すでに江戸時代の初めから世界最先端の科学技術がこの地に集積し、鉱山で活用されていた。さらに、明治以降も国策による外来技術の導入や新たな鉱山開発が行われ、採鉱～製精錬～運搬及び島外の積み出しといった、一連の金銀生産システムを理解できる建造物や機械類が現存する。				
資産の構成		保護のための措置		面積(㎡)	解　　説
		主体	保護の種別 〈　〉は指定目標		
1	相川金銀山	未	〈重要文化的景観〉	1,881,300	慶長期の本格的な開発以来、相川は佐渡の金銀山の中心的存在であり、17世紀初めには人口5万人を数えたという。相川では町衆の大半が他国から来た人たちで、中世の城下町とはまったく異質な、身分関係を持たない新しい都市が形成された。
2	上相川遺跡	未	〈国史跡〉	197,034	鶴子から相川上町台地へと移る過渡期の相川金銀山初期鉱山町跡。鉱山が最盛期を過ぎた慶安5年(1652)の記録によれば、22か町に513軒の家があった。最盛期は「上相川千軒」とうたわれ、道路と石組・平坦面によって計画的に造成された宅地・水路跡などの遺構が現在も確認でき、山師の人名や鍛冶町などの職種を示す江戸時代の町名が判明している。
3	間歩・露頭掘り群 ［父の割戸・道遊の割戸・六十枚間歩他］	国	一部史跡	30,656	父の割戸・道遊の割戸・六十枚間歩は相川金銀山の端緒となった場所で、鶴子銀山の山師によって慶長6年（1601）に発見されたという。道遊の割戸は、江戸時代に金銀鉱石を含む山を断ち割った露頭掘りの跡で、佐渡金銀山の象徴である。また、山中の沢や斜面には多くの間歩群が現存しており、間歩を描いた絵図も多く残されている。

4	宗太夫間歩	国	史跡	117	相川金銀山最大最良の鉱脈である青盤脈の中の一鉱区。江戸時代としては画期的な大型坑道で、鉱石の運搬、排水作業の便等を十分考慮に入れ、効率的な採掘稼働を目的とする「斜坑道」の代表例である。坑口の高さ約3m、幅約2mで、深い部分は海面下に達している。
5	南沢疎水道	国	史跡		坑内の湧水処理のために、岩盤をくりぬいて掘った排水用の坑道。割間歩から相川湾までの約1㎞を、手掘りにより6箇所から同時に掘り進む向掘り工法を採用し、元禄4年(1691)から5年間の短期間で掘られた。測量を担当した静野与右衛門は、オランダ人医師カスパルから鉱山測量術(振矩術)を学んだ樋口権右衛門の弟子、土田勘兵衛の門人であった。
6	佐渡奉行所跡	国	史跡	18,542	佐渡奉行所は、慶長8年(1603)に大久保長安によって鶴子から現在の地に移された。また宝暦9年(1759)には町内に散在していた選鉱※14・精錬工程をまとめた施設である寄勝場※15が建てられるなど、佐渡の鉱山経営と行政の中心であった。現在の建物は、平成12年(2000)に復元されたものである。
7	鐘楼	国	史跡	81	佐渡奉行所の時報鐘。萩原重秀の命により、佐渡産出の銅で鋳造し、正徳3年(1713)6月6日九ツ時から撞き始めたといわれている。時報は初め奉行所に太鼓を置いて知らせたことに始まり、正徳年間(1711～15)、相川丸山(六右衛門町)に鐘楼を建てたが、奉行所より遠いため現在の八百屋町に移された。
8	下戸番所跡	未	〈国史跡〉		下戸は相川の南端に位置し、寛永6年(1629)に中山道ができると、相川への入口として寛永8年(1631)に番所が設けられた。国中から相川へ入る諸物資のほとんどがここを通るため、元禄4年(1691)まで市価の一割をとる「十分の一役」という徴税機能を持っていた。
9	大久保長安逆修塔	国	史跡	71	大久保長安が生前に自身の死後の成仏を願い大安寺に建立した石塔。長安は石見や伊豆の鉱山経営も兼ね、徳川家康からの信望が厚かったが、死後は所領を没収され一族は処刑された。この石塔は越前の笏谷石※16で造った宝篋印塔※17で、法名と慶長16年(1611)の年号が刻まれる。
	河村彦左衛門供養塔	国	史跡		慶長13年(1608)に造立された巨大な五輪塔。河村彦左衛門は、上杉氏の佐渡代官として慶長5年(1600)まで佐渡を支配し、上杉氏の会津移封後も佐渡にとどまって金銀山の開発に携わったが、後に家康に改易されて佐渡を去り、慶長13年(1608)、村上で没した。供養塔には、河村の名前と共に没年号や五輪塔を造った小泊村石工の名が刻まれている。
10	鎮目市左衛門墓	県	史跡 〈国史跡〉		元和4年(1618)から9年間佐渡奉行を勤めた鎮目市左衛門は、金銀総買上制や佐渡小判及び佐渡一国通用極印銀※18の鋳造など、積極的な産金政策に取り組んだ。現在の墓は弘化2年(1845)に、9代後の子孫等により建てられた。
11	上寺町	未	〈国史跡〉		寺町は大久保長安の政策によって造られた町で、民家は無く、寺だけで一区画を成していた。上寺町は相川金銀山の南側の高位段丘に位置し、妙伝寺・法久寺・妙法寺・法華寺といった日蓮宗の寺が多かったという。現在は全て廃寺となり、寺地を示す墓石が残るのみである。
12	大安寺	未	〈国史跡〉		慶長11年(1606)、大久保長安が建立した寺で、境内には国史跡の大久保長安逆修塔と河村彦左衛門供養塔がある。開山は徳川氏と強い結びつきのあった京都大雲院の貞安で、家康の信任の厚かった長安が相川に浄土宗の信仰を広めたという点でも歴史的意義のある寺院である。当初の本堂は火災により焼失したが、12間×10間の大伽藍であったという。
13	瑞仙寺	未	〈国史跡〉		寛永元年(1624)、山師味方但馬家次が亡父家重の菩提のために建てた日蓮宗の寺。堂宇は奥州のヒノキ材をふんだんに用いた豪華な造りで、度重なる町屋の火災の被害から逃れ、現在もなおその姿をとどめている。また寺には、銀山開発の功労によって家重が家康から拝領した胴衣・茶碗・扇子・書簡などが伝わっている。
14	法輪寺	未	〈国史跡〉		相川下寺町にある日蓮宗の寺院で、慶長9年(1604)の開基とされる。当初は妙蓮寺といったが寛文9年(1669)に妙輪寺に改名、その後明治の廃絶・復興や合併を経て、昭和17年(1942)に法輪寺となる。境内には、慶長年間に青盤間歩を稼業した山師味方与次右衛門の五輪塔があり、元和4年(1618)の銘がみえる。
15	大山祇神社(下山之神町)	未	〈国史跡〉		慶長10年(1605)、大久保長安が金銀山の繁栄祈願のために下山之神町に建立した官営社。祭日には社前で大神楽と能が奉納され、拝殿には天保4年(1833)の能絵馬が飾られている。現在は鉱山の繁栄を祈る「やわらぎ」という神事芸能が奉納され、やわらぎ絵馬は佐渡市の有形民俗文化財となっている。

16	春日神社	未	〈国史跡〉		慶長10年（1605）の勧請とされ、大久保長安の庇護のもと、官費で建てられた神社。当初は鹿伏の春日崎にあったが、元和5年（1619）に現在の下戸に遷った。本殿は佐渡奉行所を建てた播州の番匠水田与左衛門の作とされる。4月5日の例祭には能が演じられ、正保2年（1645）の演能記録は、佐渡の専用能舞台披露の初見とされる。
17	相川金銀山に関係する神社［北野神社・戸河神社・大日堂・善知鳥神社・金比羅神社・関東稲荷・百足山神社・二ツ岩大明神］	未	〈国史跡〉		北野神社は金掘大工[※19]衆、戸河神社は鉱山に関わる炭焼衆の信仰を集めた。大日堂は鉱石を運搬する牛飼いの信仰を集め、金比羅神社は航海の神として信仰の対象となった。関東稲荷は金児の関東弥右衛門の勧請で、間ノ山地区の住人の信仰を集めた。百足山神社は鉱脈を意味する百足を、二ツ岩大明神はフイゴの材料であるムジナを祀っている。
18	キリシタン塚・処刑場跡	未	〈国史跡〉		相川と沢根を結ぶ旧中山道のほぼ中間の峠に位置する四方塚がキリシタン塚である。幕府によるキリスト教徒への弾圧が厳しくなると、山法で守られた鉱山に多くの教徒が潜伏したという。島原の乱があった寛永14年（1637）に、百数十人ともいわれるキリスト教信者が処刑された記録があり、以後たびたび中山の地が刑場やさらし場として使用された。
19	西五十里道	未	〈国史跡〉		沢根から旧西五十里村を通り、鶴子銀山を経て上相川へ至る旧道。戦国時代末から江戸時代初期にかけ国中と相川を結ぶ主要道路で、上相川町の入口には人々や物資の出入りを監視する上相川番所が置かれた。寛永6年（1629）、沢根から下戸へ入る中山道が出来ると、西五十里道は徐々にその機能を失い、元禄4年（1691）には上相川番所も廃止された。
20	相川の坂・石段	市	一部史跡 〈国史跡〉		相川には坂道が多いが、上町台地と下町を結ぶ生活道路として重要な役割を担っていた。佐渡奉行所から下町に下る西坂、江戸沢間から下寺町へ登る寺坂、下山之神町と坂下町を結ぶ厳常寺坂などが有名である。現在も道幅、石段の様子とも昔と変わらず、かつての面影を残している箇所が多く見られる。
21	相川下町の町並	未	〈重要文化的景観・重要伝統的建造物群保存地区〉		江戸時代に入り、相川の海岸部を埋め立ててつくられた鉱山町で、旧来の台地上の上町と対比して下町と呼ばれている。埋め立ての始まりは寛永6年（1629）といわれ、それ以降順次埋め立てが行われ、正徳年間（1711～15）頃にほぼ町割が完成した。現在も当時の町割がよく残っており、松栄家や西山家など、間口の広い町屋が軒を連ねている。
22	大工町から京町の町並	未	〈重要文化的景観・重要伝統的建造物群保存地区〉		慶長8年(1603)、相川に本格的な町立て（都市計画）を試みた大久保長安は、陣屋を中心にして金銀山番所、商人町の京町、鉱山労働者の住む大工町などを計画的に造成した。これらの町並は近世相川の中心であり、鉱山都市の時代的推移を理解する上で重要な景観を呈している。
23	寺町の町並	未	〈重要文化的景観・重要伝統的建造物群保存地区〉		近世の相川は寺の多い町で、多いときには130余の寺院があったという。谷間の狭い空間に土地造成をするという手法は民家のみならず寺院にも取り入れられ、それが、石段や坂道、また数多い寺院や境内の自然林ともあいまって、相川独特の寺院が建ち並ぶ景観を生み出した。
24	御料局佐渡支庁跡	国	史跡	2,259	明治維新後、徳川幕府から明治政府に引き継がれた相川金銀山では、近代西洋技術の導入によって新しい鉱山経営が始まった。以後、大蔵省・工部省・宮内省と所管が代わり、明治29年(1896)に三菱合資会社へ払い下げとなった。この建物は宮内省御料局時代に建てられたものである。
25	大立地区［大立竪坑］	未	〈国史跡〉		ドイツ人技師アドルフ・レーの指揮により、明治10年(1877)日本最初の欧米の技術による竪坑[※20](大立竪坑)が開削され、平成元年（1989）の休山まで使用された。竪坑開削時には巻揚げに馬が使用されたが、完成後は蒸気機関が、その後電動機が使用された。この竪坑は、佐渡金銀山のほぼ中央に位置し佐渡金銀山の近代化に大きく貢献した。
26	高任地区［道遊坑、高任坑、機械工場］	未	〈国史跡〉		明治22年(1889)から使用され、深さが667mと佐渡鉱山最深の高任竪坑、大立竪坑と高任竪坑とを結び坑内へ人や物資を運ぶための道遊坑、坑内で使用する採掘や運搬機器の修理、蓄電池式機関車の充電を行うための機械工場などがある。平成元年（1989）まで使用された鉱山事務所もこの地区に現存する。
27	間ノ山地区［高任選鉱場、搗鉱場、貯鉱舎、アーチ橋］	未	〈国史跡〉		明治18年に初代鉱山局長として赴任した大島高任によりこの地区の開発が始まり、高任選鉱場、揚鉱場[※21]などが建設された。選鉱場と搗鉱場を結ぶ石積アーチ橋は、この地区唯一の明治期の構造物である。そのほかの現在残されている施設は、昭和初期の重要鉱物増産などの国策に従って建設されたもので、破砕場、貯鉱舎、変電所などがある。
28	北沢地区［浮遊選鉱場、シックナー、火力発電所］	未	〈国史跡〉		佐渡金銀山の製錬、選鉱の中心となった地区。現在残されている施設としては、明治期の火力発電所跡、青化製錬所跡がある。さらに昭和初期の重要鉱物増産の国策により建設され「東洋一」といわれた浮遊選鉱場[※22]跡、国内最大級の直径50mシックナー(濃縮装置)、インクラインなど、当時の最先端技術で建設された施設が残っている。

29	大間地区［倉庫、クレーン台座、タタキ工法護岸］	未	〈国史跡〉		大間港は、慶長年間から昭和まで使用された港で、明治期のレンガ倉庫が残っている。昭和10年代に入ると火力発電所も建設され、それに伴って鉱産物や需要物資の移出入が急激に増加し、1．2tクレーンなどが次々と設置された。そのほか、明治25年(1892)完成のタタキ工法※23の護岸など、現在も鉱山用港湾としての基本形状が築港時のままに残っている。
30	大乗寺	未	〈国史跡〉		相川下山之神町にある真言宗寺院で、慶長17年（1612）の開基と伝えられる。本尊の聖観音は、伊丹康勝奉行の忠臣岡村伝右衛門義見が寄進したもので、御供料として寛永年間に小川に7反余の新田が開発されたという。墓地には明治期に佐渡鉱山に勤務した御雇外国人技師スコットの日本人妻と子供の墓がある。
31	相川の近代建築［旧相川裁判所・税務署・拘置支所、松栄家、佐州館、清新亭、鉱山住宅］	国	一部登録有形文化財〈重要文化的景観〉		旧相川裁判所は明治中期、旧相川税務署は昭和初期の木造建築、相川拘置支所は戦後間もなくの木造平屋建て、コンクリート造りの建物である。松栄家は大正年間建造の相川で最大級の町屋。昭和初期の雰囲気を残す佐州館や、明治期の鉱山長住宅を改装した清新亭といった老舗旅館の建物も残る。台地上には奥行きが短い鉱山労働者の住宅が建ち並ぶ。

e	その他島内に分布する資産	近世の相川金銀山の繁栄は、島内各地に大きな影響を及ぼした。鉱山技術の発達によって鉱山臼や石垣などの石材を供給する石切場が開発され、奉行や山師などの寄進によって壮大な寺社建築が造営された。急激な人口の増加は食糧供給のための新田や漁場の開発を促し、人や物資の流通も盛んになり、街道や港町の整備が急速に進んだ。

資産の構成		保護のための措置		面積(㎡)	解説
		主体	保護の種別〈 〉は指定目標		
1	石切場群［片辺鹿野浦海岸・吹上海岸・春日崎海岸・椿尾・小泊］	未	〈国史跡〉		佐渡には近世の石造物が数多く現存し、良質な石材を提供する石切場が島内各地に分布している。片辺や吹上といった外海府海岸沿いの石切場では、主に鉱石粉成用の石臼の石材が切り出された。一方真野湾岸の小泊・椿尾一帯では、墓石や穀物用石臼の石材が産出された。このように石製品の用途ごとに産地が異なることが佐渡の石切場の特徴である。
2	木崎神社	県	有形文化財〈国史跡〉		大久保長安が佐渡金銀山の繁栄と金銀輸送の安全を願い創建した神社で、慶長14年(1609)に建立された本殿の棟札が現存している。相川から運ばれた金銀は、出雲崎への船待ちのために木崎神社に納められたという。
3	金北山神社群	未	〈国史跡〉		金北山は古くは北山と呼ばれ、中世より修験信仰の対象として崇拝されたが、いつの頃からか金北山と称され、金銀山の繁栄との関連がうかがえる。山頂には奥宮があり、山麓の村々には里宮やそれに類する社が造られ、戦国時代末には真光寺の金北山神社が里宮の中心的存在となった。現在も小川や西野などに金北山信仰を継承する神社が数多く残っている。
4	相川往還	市	一部史跡〈国史跡または重要文化的景観〉		相川から小木までの街道。特に中山旧街道は、寛永5年(1628)頃に開かれた金銀輸送のための公道で、明治18年(1885)に掘割新道ができるまでの約260年間利用された。江戸から着任する佐渡奉行、また唐丸籠で佐渡へ送られてきた水替無宿※24、あるいは商人や年貢米を運んだ牛も、みなこの往還※25道を通った。
5	赤泊道	未	〈国史跡〉		赤泊は対岸の越後に近く、中世以来の港である。江戸時代中期に佐渡奉行の上陸地が赤泊港に限定されると、赤泊道は公道として整備された。文政年間には赤泊・寺泊間に定期船が就航し、一般の利用が増加したため、赤泊道を通る人や物の往来も盛んになった。
6	国分寺瑠璃堂	市	有形文化財〈重要文化財〉		国分寺は古代から佐渡の人々の信仰を集め、本尊の薬師如来坐像は平安時代の作とされ、重要文化財に指定されている。薬師如来坐像が安置されていた瑠璃堂は、棟札から寛文6年(1666)の建立であることが分かる。なお、寺記によれば、その後の寛政5年(1793)と文化9年(1812)に2度の修復が行われている。
7	蓮華峰寺弘法堂	国	重要文化財		蓮華峰寺は新義真言宗智積院の末寺で、弘法堂には弘法大師を祀る。寺の創立沿革については詳らかでないが、江戸時代には東照・台徳の二廟を建て、90石5斗の朱印を賜り多数の末寺を有していた。弘法堂の建立は墨書により慶長13年(1608)から翌年にかけて行われたことが確認できる。

8	小比叡神社本殿・鳥居	国	重要文化財		大久保長安により創建された小比叡神社は、もと蓮華峰寺の鎮守で山王大権現と称したが、明治の神仏分離により小比叡神社と改められた。本殿の建立は、棟札により寛永17年(1640)であることが確認される。また鳥居は大久保長安らが寄進したもので、「建立慶長13年（1608）」の銘がある。九州方面の形態を持つ鳥居としては、日本海側最北といわれる。
9	妙宣寺五重塔	国	重要文化財		妙宣寺は、日蓮の弟子日得が鎌倉時代後期に自宅を寺として開いたのが始まりといわれる。五重塔は、江戸時代後期に建てられ、相川の番匠の棟梁親子が2代30年がかりで完成させた。 高さ24.11m、1辺3.6m。柱にはスギ材、他部位にはマツやケヤキ材が使われている。新潟県内唯一の五重塔である。
10	根本寺	未	〈重要文化財〉		日蓮配所の所在地と伝えられる古刹。相川夕白町の名のもとになった山師備前遊白が慶長12年(1607)に祖師堂を建立し、また山師の味方但馬が釣鐘や鐘楼などを寄進した。墓地には味方但馬一族の五輪塔がある。根本寺は、熱心な法華信者であった山師たちの財力により立派な伽藍を持つようになったといわれる。
11	長谷寺五智堂	県	有形文化財 〈重要文化財〉		縁起には、正保年間(1644～47)に五智堂を造って五智仏を移し、さらに延享2年(1745)に多宝塔を建立してここに安置したとある。塔の内陣は円形平面を持つ大塔形式を踏襲しており、全国的にも数少ない貴重な建造物である。
12	小木の港町・内の澗	未	〈重要文化的景観〉		小木港は慶長9年（1604）、大久保長安によって開かれ、金銀の積出港、西廻り航路の風待ち港、越後からの渡海場として栄え、近世における佐渡第一の港であった。港町は当時の町割りがよく残り、「出桁造り」の家も多く、江戸から明治の雰囲気が残る。また、東西に開いた内の澗・外の澗二つの港により、北東風にも南西風にも強く、一年を通じて良港であった。
13	海岸段丘の水田景観 ［小川・達者集落他］	未	〈重要文化的景観〉		慶長年間以降、金銀山に集まった人々の食糧を供給するために新田開発が行われた。海岸段丘の水田は、さらに高い場所から水を引かなければならず、相川から続く海岸段丘では、北東側に向かって土地が少しづつ高くなるため、開発のしやすい相川近辺から新田が開かれた。現在も海を見下ろす高台に棚田が連なっている。
14	姫津漁村	未	〈重要文化的景観〉		金銀山の開発によって相川の人口が急増すると、タンパク源不足を補うため、島根県石見地方から漁師を移住させる政策が執られた。姫津漁村はその伝統を引き継ぐ村で、現在でも石見姓が大多数を占める。海岸に面した崖下の狭い地割りの中に200戸の民家と狭い路地が密集し、多くの家が現在も漁業を生業としている。
15	八幡砂丘の畑地帯	未	〈重要文化的景観〉		八幡から四日町にかけての真野湾に面した砂丘地では、相川に供給するための野菜栽培が行われた。松・笹等の防風林によって細かな区割りが行われ、当時の景観をとどめている。現在もこの地域は野菜や花卉栽培が盛んで、相川往還に面した農村集落は宿場町と異なり、母屋、納屋などを備えた規模の大きな農家が整然と並ぶ独特な景観を示している。
16	佐渡の能舞台群	県	有形民俗文化財(8棟) 〈重要文化的景観〉		佐渡には33棟の能舞台が現存する。そのうち1棟を除きいずれもが神社に付属し、地域の祭礼などで演能された。大久保長安によってもたらされた佐渡の能は、江戸時代後期に政策の一環として奉行所が奨励したこともあり、米作を生業とする農村を中心に、急速に伝播していった。
17	宿根木	国	重要伝統的建造物群保存地区	285,000	宿根木が最も繁栄したのは、西廻り航路の全盛期であった江戸時代後期である。その頃の宿根木は船持ちと船乗り、船大工等多くの人々が居住する「高密度な都市的集住空間」を整え、ほとんどの住民が廻船業に携わる生活を営んでいた。宿根木には、廻船業によって栄え形作られた歴史と文化が色濃く残されている。
18	御林（新潟大学演習林）	未	〈国天然記念物〉		佐渡の山林は、江戸時代には金銀山に必要な炭などの用材として管理され、また杉林は日本海側随一の舟材供給元として保護されてきた。特に大佐渡地帯にある南片辺集落の「舟山の天然杉林」、また関集落の新潟大学演習林は県の重要植物群落にも指定され、佐渡の山林の原生林として貴重なものである。
19	両津カトリック教会	未	〈重要文化財〉		佐渡にカトリックの布教が始まったのは明治11年（1878）のことで、佐渡の玄関口である両津と鉱山で栄えた相川が布教の中心となった。明治21年に建てられた相川の教会は取り壊されたが、明治20年建造の両津の教会は、鶴岡カトリック教会（重要文化財）や京都の旧聖ザビエル教会などを手がけたパピノ神父の設計で、日本海側で最も古い木造の聖堂である。
20	二見の町並	未	〈重要文化的景観〉		近世二見港は、相川の外港として栄えた。明治初期に埋め立てが行われ、鉱山の鉱石・資材の運搬に利用されたが、現在は近代的な港に整備されている。明治以降に二見新地という集落ができ、遊郭で栄えた。現在も「出桁造り」の遊郭の特徴を残す町並が続いている。

B）関連する資産

f	民俗芸能	幕府が本格的な鉱山経営に着手し始めた慶長～元和期(1596～1623)の佐渡は、まさにゴールドラッシュの様を呈していた。海を渡り、島に伝えられた文化は、伝えた側の土地では忘れ去られても、佐渡においては消えることなく伝承され続けた。島という地勢と、鉱山を目指して海を渡って来た人々が、佐渡を「芸能の宝庫」にしたといえる。			
資産の構成		保護のための措置		面積(㎡)	解　　説
		主体	保護の種別 〈　〉は指定目標		
1	金北山神社例祭神事	市	無形民俗文化財 〈県無形民俗文化財〉		鶴子銀山の山師秋田権右衛門の寄進を受けた神社で、祭礼は9月20日（現在は4月15日）である。以前は五十里祭と称して、西野・東野・炭屋町・田中町など旧五十里地区一帯の大祭であった。祭礼日には神幸祭・下り囃・鬼太鼓が行われ、かつては能も奉納されていた。特に鬼太鼓は、相川の善知鳥神社より伝わったとされる「豆まき系」である。
2	沢根白山神社の祭礼	未	〈県無形民俗文化財〉		由緒によれば旧地は中山にあって、その後沢根地頭代の沢根本間氏によって城内に遷され、城山神社と称したという。享保14年（1729）に現在の地に遷り、沢根港に出入りした船主達の信仰を集め、寄進された船絵馬は佐渡市の有形民俗文化財に指定されている。例祭日には下り囃、獅子・鬼太鼓などが出る。かつては神子神楽、男舞い、能も奉納されていた。
3	佐渡の人形芝居 ［説経人形・のろま人形・文弥人形］	国	重要無形民俗文化財		佐渡の人形芝居は古浄瑠璃の形を残す1人遣い形式である。江戸時代初期に流行したといわれる「説経人形」、寛文年間(1661～72)に始まったとされる幕間狂言の「のろま人形」、京都・大坂で流行した文弥節を伝承した江戸期の盲人の座語りが明治初期に人形芝居と結びつき成立した「文弥人形」の3種類に分類される。
4	佐渡鷺流狂言	県	無形民俗文化財		かつて狂言には大蔵・和泉・鷺の3流があった。鷺流は幕府の御用を勤め隆盛を極めた流派であったが、大正初期に中央では廃絶し、芸脈を地方狂言の中に残すのみとなった。佐渡はその鷺流狂言を伝承してきた地方の一つであり、宗家仁右衛門の流れをくむ狂言が色濃く伝承されてきた地である。
5	善知鳥神社祭礼行事	市	無形民俗文化財 〈県無形民俗文化財〉		相川の総鎮守として慶長5年（1600）に社殿が造営され、寛永20年（1643）に祭礼神事が始まったとされる。神輿は伊丹康勝奉行の寄進で、町内を渡御した後、奉行所の大御門前で祈祷が行われた。祭礼は島内最大の祭りとされ、荘厳華麗な様子が絵図に描かれている。現在も相川祭として広く民衆に受け継がれている。
6	大山祇神社のやわらぎ	未	〈重要無形 民俗文化財〉		鉱山独特の神事芸能で、別名「蓬莱（宝来）」ともいわれ、百足を描いた裃を身に着けた親方と紺の法被に股引姿の子方によって「金掘唄」を唄い演じられる。金山では、正月十一日を登山始めとし、広間役以下従事者一同による大山祇神社詣での儀式が行われ、神事の後に金掘大工が「金掘唄」を奉唱した。
7	鬼太鼓	未	〈県無形民俗文化財〉		佐渡を代表する民俗芸能で、豆まきの翁が舞う「豆まき系」、太鼓に笛が加わる番楽風の「前浜系」、鬼に2匹の獅子が絡む「国中系」の鬼太鼓に大別できる。いずれも、鎮守の祭礼などに若者たちによって奉納され、その伝承団体の数は100を超える。
8	佐渡の民謡	未	〈県無形民俗文化財〉		江戸時代、北九州の港を中心に流行した「はんや」が北前船などによって赤泊や小木に伝わり、おけさ節になったといわれる。明治の中頃には、相川鉱山の労働者や小木の芸者達によっておけさ節にあわせて踊る佐渡おけさや小木おけさが始まった。また、江戸中期の盆踊り唄に端を発する相川音頭や両津甚句といった民謡も現在に伝わる。
9	鉱山祭り	未	〈県無形民俗文化財〉		相川下山之神町の大山祇神社の祭礼で、明治維新以来久しく途絶えていたものを、鉱山局長であった大島高任が明治21年（1888）に復活したのが始まりとされる。大島は荒廃していた社殿を修築し、祭典は軍隊に模して行進し、隊列ごとに燈篭や山車を添え、綱引き、能、花火など賑やかな祭を行った。神事芸「やわらぎ」もこの時復活されたという。

g	民俗技術	姫津は石見の漁師によって形成された漁村で、金銀山の開発に伴い急激に増加した食糧需要を賄うために大量の漁獲を可能とする延縄漁を伝えた。また、北部海岸地帯では、相川金銀山の開発によって水田開発が進み、綿花栽培の畑地が少なくなったことから、樹木繊維を使用した織物技術が発達した。このように、江戸時代における金銀山の開発は、佐渡に様々な生業技術をもたらす要因となった。

資産の構成		保護のための措置		面積(㎡)	解　　説
		主体	保護の種別 〈　〉は指定目標		
1	佐渡海府の紡織用具	国	重要有形民俗文化財		江戸時代の中期以降に、回船によって繰綿や古木綿が持ち込まれると、シナを縦糸に、古木綿を細く裂いて横糸にして織る裂織が作られるようになった。シナ織、裂織の製品と紡織用具は、この地域の紡織習俗の様相だけでなく、我が国の衣料生活の推移を知る上で貴重な資料である。
2	南佐渡の漁撈用具	国	重要有形民俗文化財		岩礁が多く複雑なリアス式の小木海岸線で使用された漁撈用具。佐渡でも漁業の機械化により、近年急速に消滅しつつある技術が大多数であるが、漁法の伝播、漁場の違いによる漁具の工夫の痕、素材の種別による漁具製作や使用法の違いが理解される資料である。
3	北佐渡の漁撈用具	国	重要有形民俗文化財		包括して北佐渡と呼ばれる地域の磯ねぎ、釣漁、網漁などの漁撈法用具。この地方の海況と漁撈法に応じた特色をうかがうことができる漁船、イカ釣具や揚浜製塩用具などは地域的特色を示すものとして注目される。北佐渡地方の漁撈技術を理解する上で質量ともに優れて重要なものである。
4	船大工用具及び磯舟	国	重要有形民俗文化財		回船によって繁栄した小木には船大工が多く、和船を造る技術を伝えてきた。機械化により不要となった造船道具や、和船模型・船型絵馬により当時の和船構造と規模、また海上での信仰を知ることができる。これらは船大工の製作技術と船乗りの航海技術を現在に残す貴重な資料である。
5	佐渡のタライ舟製作技術	国	重要無形民俗文化財		タライ舟は三尺桶を半分に切ったもので「ハンギリ」ともいわれ、磯漁に使用される。組んだ杉板に、真竹の箍を巻いて楕円形に仕上げていく。現在、製作技術の消滅が危惧されており、保存団体をもとに技術伝承活動が進められている。
6	佐渡の蝋型鋳金技術	県	無形民俗文化財		佐渡の蝋型鋳金技術は、越後出身の初代本間琢斎が弘化4年(1847)に佐渡奉行中川飛騨守の委託により、鶴子で大砲を鋳造したことが始まりといわれ、以来沢根を中心にその製法が広まり、人間国宝となった佐々木象堂などを輩出した。
7	佐渡の無名異焼	市	無形文化財 〈県無形文化財〉		金銀の採掘時に出る、酸化鉄を多量に含んだ赤土を用いた焼物。19世紀初頭に楽焼が始まり、明治時代に入り高温で焼成した硬質の無名異焼が完成した。成形後、磨き石などで磨き、光沢を出し、かつ焼成後、再び磨、き光沢を出す。光沢を出すために二度の作業を行なうのが、他の陶器に見られない特殊な技術である。

h	記録など	佐渡は、幕府が最も重要視した江戸時代随一の金銀山が存在した島であり、慶長8年(1603)～慶応3年(1867)までの265年間、一貫して一国天領として江戸幕府の支配下にあった。そのため、鉱山に関する古文書や絵図などの史料が数多く残り、鉱山用具も受け継がれ、佐渡金銀山の大きな特徴の一つとなっている。

資産の構成		保護のための措置		面積(㎡)	解　　説
		主体	保護の種別 〈　〉は指定目標		
1	西三川砂金山絵図・絵巻	未	〈県有形文化財〉		西三川砂金山絵図には、江戸時代の砂金が採られていた山や、砂金流しのための水路・受堤、笹川集落の様子などが描かれており、砂金山の位置や範囲を知る上で大変貴重な史料である。一方絵巻には、江戸時代の砂金採取の一連の作業工程やその説明が描かれており、砂金採掘の技術を理解できる貴重な史料である。

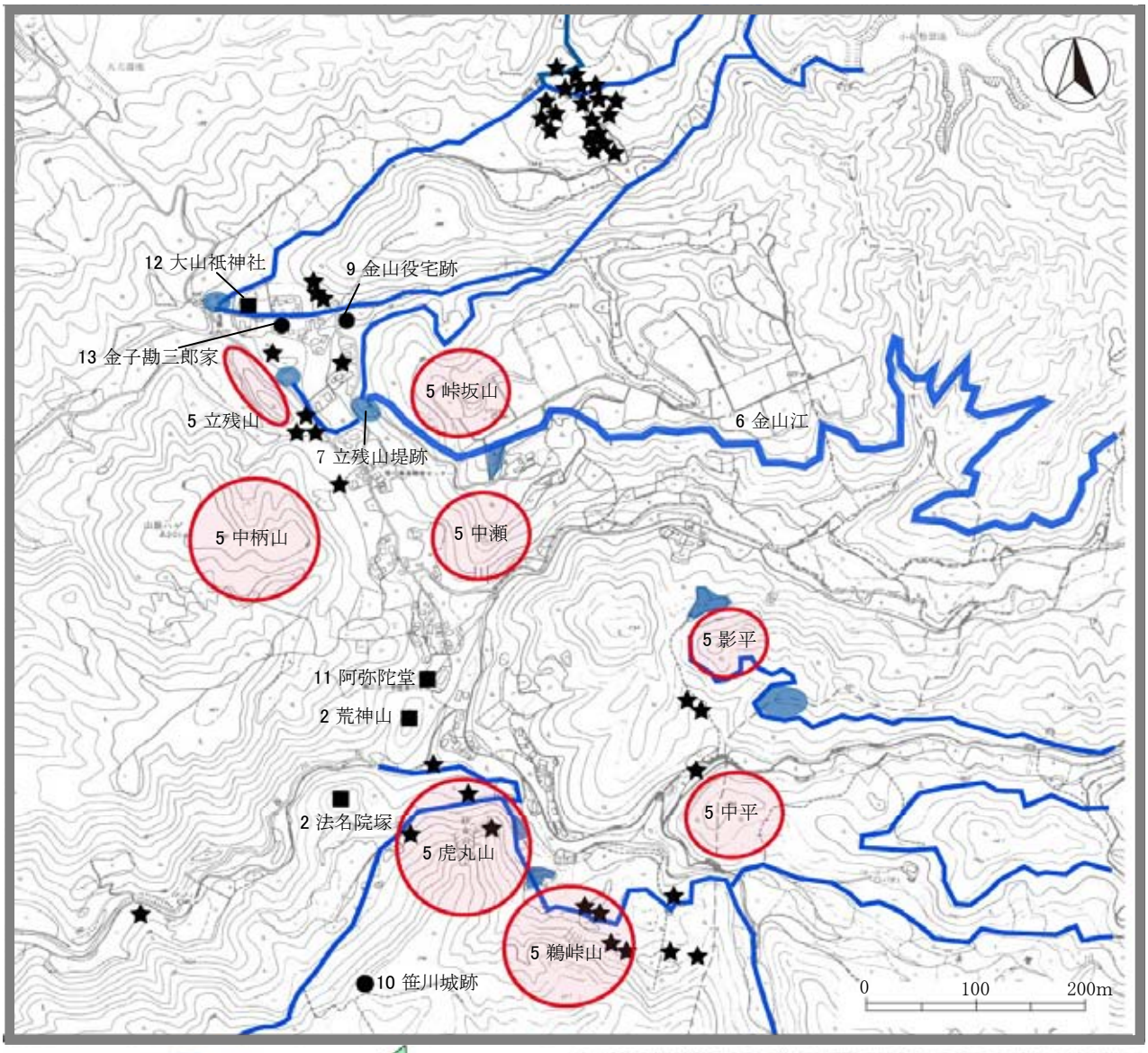
2	金子勘三郎家文書	市	有形文化財 〈県有形文化財〉		江戸時代、笹川十八枚村の名主であった金子勘三郎家に伝わるもので、江戸時代初期の砂金採掘法や砂金山経営のあり方が記録されている。平成2年（1990）に旧真野町（現在は佐渡市）の文化財に指定され、平成13年には砂金山関連の史料目録が作成された。
3	笹川砂金山砂金採取用具	市	有形民俗文化財 〈県有形民俗文化財〉		西三川砂金山の中心である笹川集落で古くから砂金採取のために使用されてきた用具。砂金含みの土砂を掘りおこす「鶴首」や、それを溜める「盥」、砂と砂金を分離するための「汰板」や砂金を計量する「砂金秤」などが現存しており、26点の資料が佐渡市の有形民俗文化財に指定されている。
4	鶴子銀山絵図	未	〈県有形文化財〉		鶴子銀山の絵図は多数存在するが、沢ごとに区切られているのが特徴である。「松ヶ沢仕出喜沢屏風沢草見立絵図」は、慶安5年（1652）に山師秋田権右衛門によって作成されたもので、番所や小屋などが詳細に描かれている。「鶴子間歩惣敷絵図」は、宝永3年（1705）の作図にいくつかの図を書き加えたものであり、鶴子沢周辺の間歩が描かれている。
5	新穂銀山絵図	未	〈県有形文化財〉		江戸時代の新穂銀山の様子を描いた絵図。「滝沢銀山岡山絵図」は安政6年（1859）の作で、立合の方向・長さや目印となるもの、銀山の由来などが書かれている。「滝沢銀山惣敷内墨引き」は、銀山の稼ぎ場の位置が描かれている。
6	上相川絵図	未	〈県有形文化財〉		鶴子銀山から相川金銀山へ鉱山の中心が移る過渡期に成立した上相川町の様子を描いた絵図で、享保18年（1733）と宝暦2年（1752）の作成とされる2点の絵図には、道路と石組・平坦面によって計画的に造成された宅地・水路の跡などが描かれており、現在も地表面からその様子をうかがい知ることが出来る。
7	佐渡奉行所関連絵図・ 鉱山絵巻・鉱山絵図	市	有形文化財（一部） 〈県有形文化財〉		佐渡奉行所関連絵図は寛政年間から幕末にかけてのもので、佐渡奉行所の配置や相川の町並、奉行の赴任道中の様子などが描かれている。その他にも、奉行などの役人が、佐渡在勤の記念や上司への贈答品として絵師に描かせた絵巻類や、振矩師などの鉱山技術者が、坑内で測量等に使用した絵図類などが数多く現存している。
8	川上家文書	県	有形文化財		慶長10年（1605）から18年までの金銀山の様子や鉱山経営の実態が記されている貴重な史料で、慶長年間に相川で水銀アマルガム法が行われたことが記されている。また、佐渡金銀山の元締岩下惣太夫から駿府の大久保長安に送られた金銀山の状況報告や指示を仰ぐ書状、御直山への鍛冶炭・ろうそくの渡帳なども残っている。
9	舟崎文庫史料	未	〈県有形文化財〉		旧東京帝国大学教授の萩野由之博士が生前に収集した佐渡関係の史料・書籍・写真で、衆議院議員の舟崎由之が買い取り、佐渡高等学校同窓会に寄贈したものである。史料の中には江戸時代から明治における佐渡鉱山関係の絵図があり、当時の鉱山の状況を知る上で大変貴重な史料である。
10	味方但馬家資料	未	〈県有形文化財〉		佐渡金山の山師である味方但馬家に代々伝わる資料で、鉱山開発の功労によって家重が家康から拝領した胴衣・茶碗・扇子・書簡などがある。また、鉱山に関する絵図・諸願書・鉱山売買証文・訴状などがあり、江戸時代における佐渡金銀山の運営を知る上で貴重な史料である。
11	佐渡奉行所跡出土品 一括	県	有形文化財 〈重要文化財〉		平成6年（1994）から10年（1998）にかけて行われた佐渡奉行所跡の発掘調査によって出土した遺物で、金銀の精錬に関係する鉛板や羽口などの土製品、石臼、叩石など400点以上の資料が新潟県有形文化財に指定された。その中でも鉛板は、純度の高い金銀を生産する際に必要不可欠なもので、寛永年間に非常用として埋めたとされる鉛が発見されている。
12	相川金山鉱具	市	有形民俗文化財 〈県有形民俗文化財〉		相川金銀山の坑道を掘り進むために用いた道具。坑道を掘り進むためのタガネやツチ、鉱石運搬用のカマス、坑道内を照らす照明具、排水用のつるべや水上輪など、いずれも江戸時代における採掘技術を理解する上で貴重な資料である。
13	佐渡鉱山関係施設等 設計図　一括	県	一部有形文化財 〈有形文化財追加〉		鉱山関係の施設や機械類の設計図で、昭和10～20年代に作成されたものが大部分を占める。1,300点を越える資料が保管されており、先進的な技術を取り入れながら近代化を進めてきた鉱山経営の様子を知ることができる大変貴重な資料である。
14	石工民具	未	〈県有形民俗文化財〉		江戸時代、石工の村として栄えた小泊・椿尾に伝わる石工道具。山から石を切り出す際に用いるヤややヤマドリタガネ、玄能といった山道具と、製品に加工する際に用いるシアゲタガネやノミ、サクリといった仕上げ道具に大別される。現在も椿尾集落には、石工技術が継承されている。。

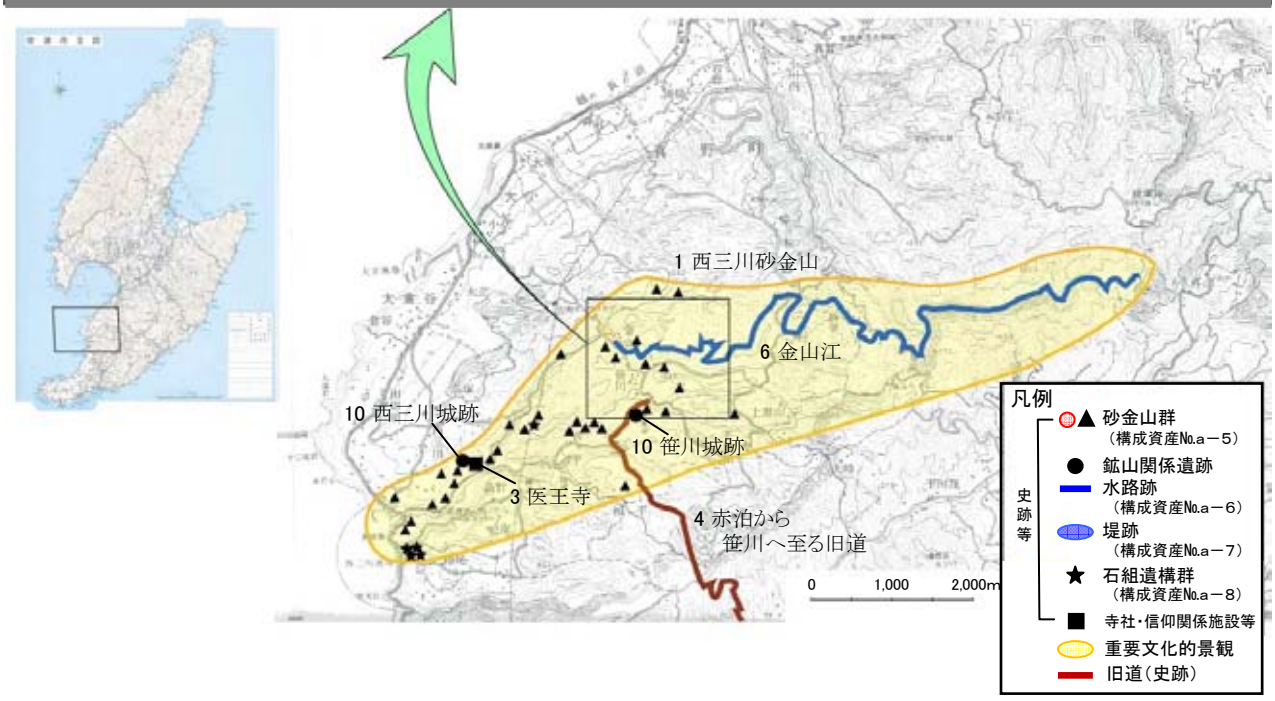
【用語解説】

No.	用　語	ページ	解　説
※1	山師(やまし)	6	古くは山仕、山主とも記した。一山・一坑の支配者。鉱山経営の技術者などの関係者を従えていた。
※2	大盛り(おおさかり)	7	金銀山が繁栄すること。
※3	露頭掘り(ろとうぼり)	7	鉱脈が露出した部分（露頭）に沿って、鉱脈だけを掘り採る採掘方法。坑道掘り以前の技術。
※4	間歩(まぶ)	7	戦国時代から江戸時代における鉱山の坑道をさす。
※5	灰吹法(はいぶきほう)	7	鉛を使った製錬法で、日本へは大陸から伝えられた。佐渡では天文11年(1542)頃に鶴子銀山で用いられたのが最初といわれる。
※6	製錬(せいれん)	7	鉱石から金銀を抽出すること。
※7	ひ押し掘り（ひおしぼり）	7	鉱脈を追いかけて地中を掘り進んで行く方法。後に水平方向に掘り進んでいく「横相（よこあい）」に発展した。露頭掘りから坑道掘りへ移る過渡期の技術。
※8	精錬(せいれん)	7	製錬で得た金銀から不純物を取り除くこと。
※9	床屋(とこや)	7	精錬をする設備をもった場所。床屋はフイゴの床からつけられた名称という。
※10	直山（じきやま）	8	幕府が直接経営する鉱山で、山師に炭や薪などの生産資材を無料給付するかわりに、採掘された鉱石の一部を公納させる制度。
※11	水銀アマルガム法 (すいぎんあまるがむほう)	9	水銀を利用する銀の精錬法で、灰吹法に替えて慶長11年(1606)頃から数年間相川で行われた。
※12	アルキメデスポンプ	9	水上輪ともいう。円筒状の木筒で、内部に螺旋堅軸が装置され、上端についたクランクを回転させると水が順々に汲み上げられて、上部の口から排出される。
※13	スポン樋（すぽんとい）	9	スポイトの原理を応用した、一種のピストンポンプ。元和4年（1618）、水没していた割間歩の排水のために味方但馬が用いたという。
※14	選鉱(せんこう)	9	採掘した鉱石を金銀を含む部分とそうでない部分とに分け、さらに金銀鉱石の等級を仕分けする作業。
※15	寄勝場(よせせりば)	9	勝場は鉱石を製精錬する所。鉱石の買い取り、製錬など個々の作業場を、宝暦年間に一箇所に集約して寄勝場ができた。
※16	笏谷石(しゃくたにいし)	10	越前足羽山に産出する石材。加工しやすく、石仏や棟石・橋梁などに利用された。北前船により日本海側の広い地域で使用された。
※17	宝篋印塔（ほうきょういんとう）	10	墓塔・供養塔などに使われる仏塔の一種。滅罪や延命などの利益から、追善・逆修の供養塔、墓碑塔として造立された。
※18	極印銀(ごくいんぎん)	10	江戸前期に佐渡国内で流通した独自の銀貨。島内産の金銀に極印などの文様を刻み、一定の品位を保証した貨幣として用いられた。
※19	金掘り大工(かなほりだいく)	11	鏨と鎚で鉱石を採掘する労働者。佐渡では普通の家大工は番匠と呼んだ。金穿大工とも記す。
※20	竪坑(たてこう)	11	斜坑・横坑などに対し、垂直に掘り下げた坑道。
※21	搗鉱場（とうこうば）	11	明治24年（1891）に完成した、品質の悪い鉱石を製錬する施設。昭和27年（1952）、鉱山の大規模な縮小化に伴い閉鎖され、鉄筋コンクリート壁だけが残る。
※22	浮遊選鉱場(ふゆうせんこうば)	11	昭和15年(1940)に完成した選鉱・精錬用の施設。当時、相川の海岸一帯にあった金銀を含む浜石を処理し、大量の金銀を産出した。
※23	タタキ工法(たたきこうほう)	11	消石灰と真砂の練土の表層に自然石を張り込んでたたき固める工法。コンクリート普及以前の工法であり、保水性・耐久性に優れる。
※24	水替無宿(みずかえむしゅく)	12	18世紀中頃から坑内の湧水を処理する労働力が不足したため、江戸から送り込まれた無宿人をいう。
※25	往還(おうかん)	12	主要街道のこと。江戸時代には小木・相川間の街道、ついで赤泊・新町から相川を結ぶ街道が主要な街道であった。

2　構成要素ごとの位置図と写真

（a） 西三川砂金山位置図





砂金山群（虎丸山） a-5

笹川十八枚村砂金山絵図 h-1

金子勘三郎家 a-13

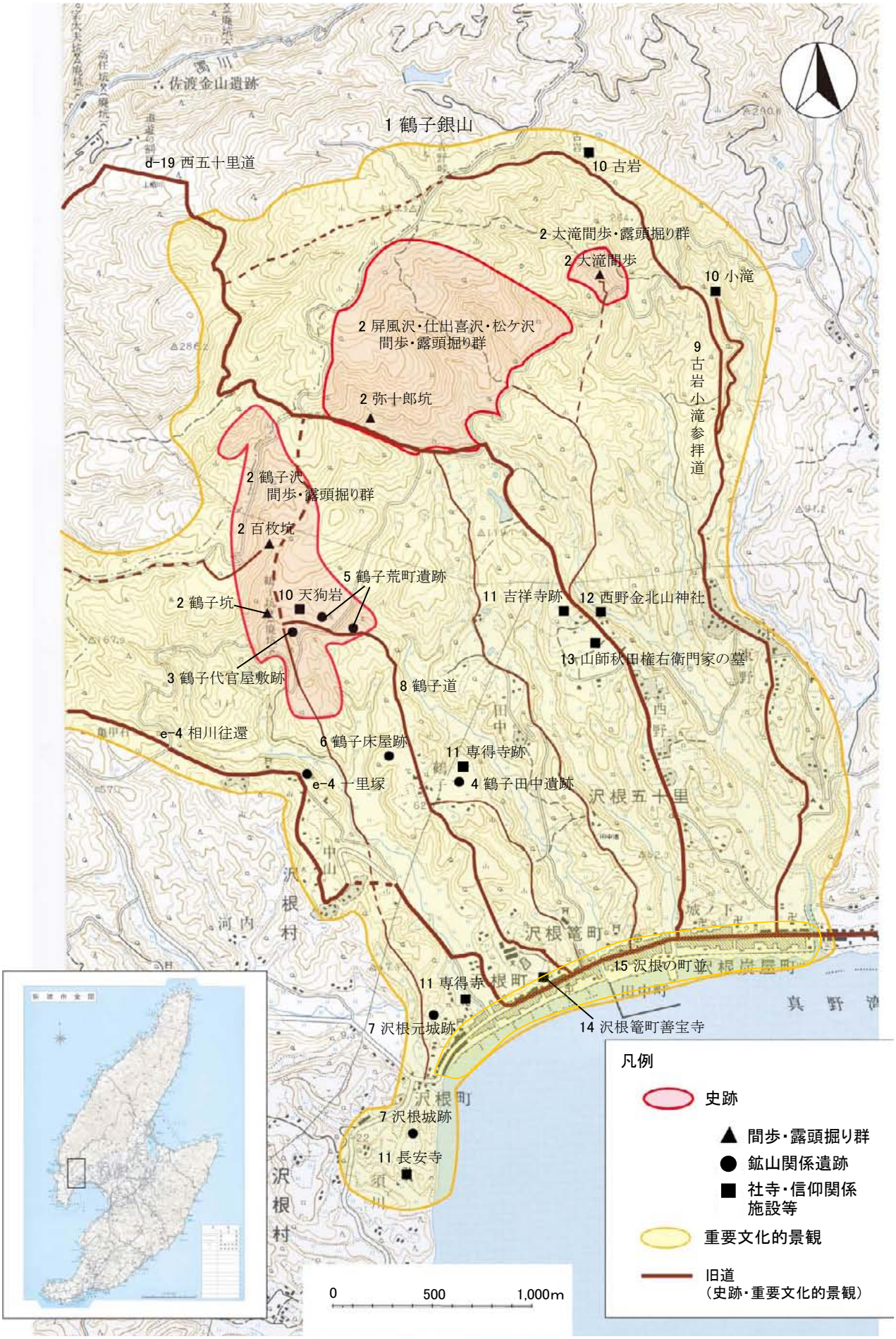
水路跡 a-6

金山役宅跡 a-9

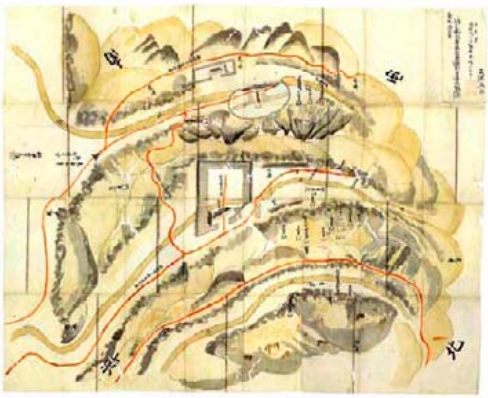
阿弥陀堂内陣 a-11

大山祇神社と能舞台 a-12

(b)鶴子銀山位置図


1 鶴子銀山
d-19 西五十里道
10 古岩
2 大滝間歩・露頭掘り群
2 大滝間歩
10 小滝
2 屏風沢・仕出喜沢・松ケ沢
間歩・露頭掘り群
9 古岩小滝参拝道
2 弥十郎坑
2 鶴子沢
間歩・露頭掘り群
2 百枚坑
5 鶴子荒町遺跡
10 天狗岩
2 鶴子坑
11 吉祥寺跡
12 西野金北山神社
13 山師秋田権右衛門家の墓
3 鶴子代官屋敷跡
8 鶴子道
e-4 相川往還
6 鶴子床屋跡
11 専得寺跡
e-4 一里塚
4 鶴子田中遺跡
沢根五十里
沢根村
沢根篭町
15 沢根の町並
11 専得寺
14 沢根篭町善宝寺
7 沢根元城跡
7 沢根城跡
11 長安寺
0
500
1,000m
凡例
史跡
間歩・露頭掘り群
鉱山関係遺跡
社寺・信仰関係施設等
重要文化的景観
旧道
(史跡・重要文化的景観)

鶴子銀山遠景 b-1



松ヶ沢仕出喜沢屏風沢草見立絵図 h-4

鶴子沢露頭掘り跡 b-2

鶴子荒町遺跡 b-5

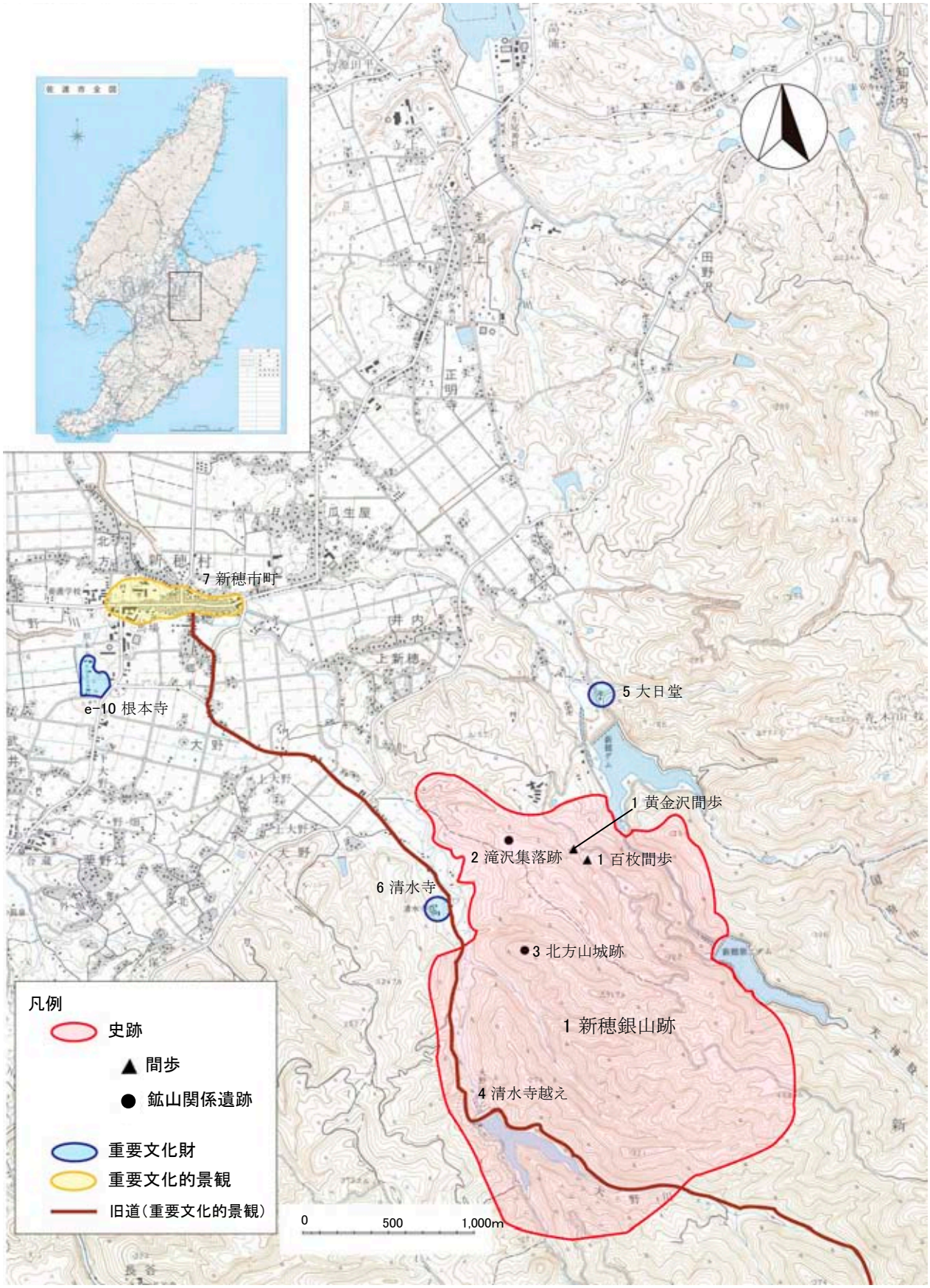
小滝 b-10

山師秋田権右衛門家の墓 b-13

西野金北山神社 b-12

沢根篭町善宝寺と沢根の町並 b-14・b-15

(c)新穂銀山位置図


7 新穂市町
e-10 根本寺
5 大日堂
1 黄金沢間歩
2 滝沢集落跡
1 百枚間歩
6 清水寺
3 北方山城跡
1 新穂銀山跡
4 清水寺越え
凡例
史跡
間歩
鉱山関係遺跡
重要文化財
重要文化的景観
旧道(重要文化的景観)
0
500
1,000m

滝沢集落跡 c-2

滝沢銀山岡山図 h-5

黄金沢間歩 c-1

百枚間歩 c-1

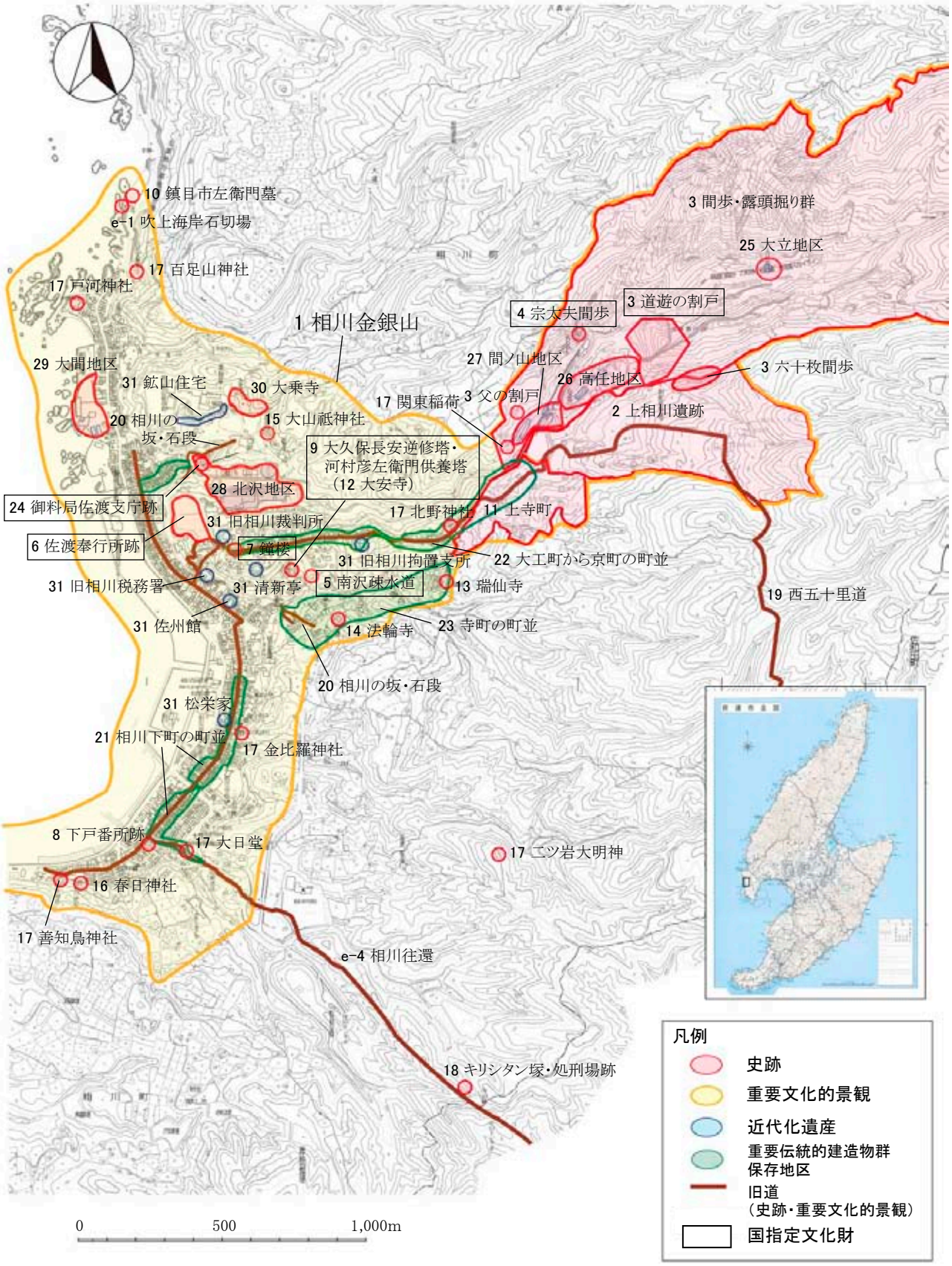
清水寺 c-6

大日堂 c-5

新穂市町 c-7

清水寺越え c-4

(d)相川金銀山位置図


10 鎮目市左衛門墓
e-1 吹上海岸石切場
17 百足山神社
17 戸河神社
1 相川金銀山
29 大間地区
31 鉱山住宅
30 大乗寺
20 相川の坂・石段
15 大山祇神社
9 大久保長安逆修塔・河村彦左衛門供養塔（12 大安寺）
28 北沢地区
24 御料局佐渡支庁跡
6 佐渡奉行所跡
31 旧相川裁判所
7 鐘楼
31 旧相川税務署
31 清新亭
5 南沢疎水道
31 佐州館
14 法輪寺
23 寺町の町並
20 相川の坂・石段
31 松栄家
21 相川下町の町並
17 金比羅神社
8 下戸番所跡
17 大日堂
16 春日神社
17 善知鳥神社
e-4 相川往還
18 キリシタン塚・処刑場跡
17 二ツ岩大明神
3 間歩・露頭掘り群
25 大立地区
3 道遊の割戸
4 宗太夫間歩
27 間ノ山地区
26 高任地区
3 六十枚間歩
17 関東稲荷
3 父の割戸
2 上相川遺跡
17 北野神社
11 上寺町
31 旧相川拘置支所
22 大工町から京町の町並
13 瑞仙寺
19 西五十里道
0
500
1,000m
凡例
史跡
重要文化的景観
近代化遺産
重要伝統的建造物群保存地区
旧道（史跡・重要文化的景観）
国指定文化財

佐渡奉行所跡（復元） d-6

鐘楼 d-7

南沢疎水道 d-5

寺町の石段 d-20

宗太夫間歩 d-4

相川下町の町並 d-21

上相川遺跡 d-2

上相川絵図 h-6

大間地区（大間港）　d-29

北沢地区（火力発電所）　d-28

北沢地区（シックナー）　d-28

北沢地区（浮遊選鉱場跡）　d-28

大立地区（竪坑櫓・巻揚室内巻揚機）　d-25

高任地区（道遊坑入口）　d-26

間ノ山地区（搗鉱場）　d-27

間ノ山地区（貯鉱舎）　d-27

その他島内に分布する資産

椿尾石切場 e-1

鹿野浦海岸石切場、矢穴 e-1

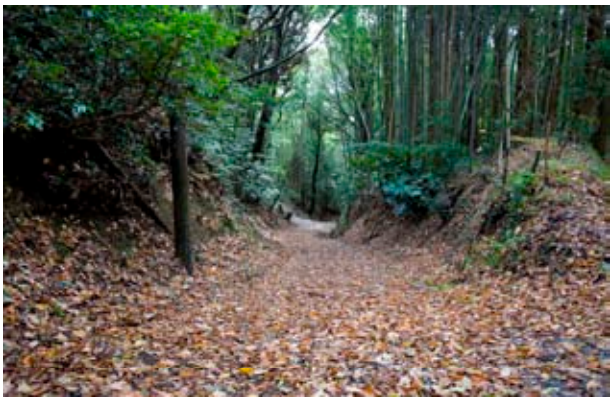
春日崎石切場の線彫地蔵磨崖仏 e-1

吹上海岸石切場 e-1

相川往還（中山道　沢根中山一里塚）　e-4

相川往還（小木一里塚）　e-4

相川往還（相川道　小泊中山）　e-4



赤泊道（徳和）　e-5

その他島内に分布する資産

小木の港町（内の潤） e-12

宿根木（世捨小路）e-17

木崎神社 e-2

二見の町並 e-20

御林（新潟大学演習林）
e-18

海岸段丘の水田景観（小川） e-13

姫津漁村 e-14

佐渡の能舞台（牛尾神社薪能） e-16

その他島内に分布する資産及び関連する資産

妙宣寺五重塔 e-9

小比叡神社・鳥居　e-8

長谷寺五智堂 e-11

両津カトリック教会 e-19

小木のタライ舟 g-5

無名異焼 g-7

大山祇神社のやわらぎ f-6

善知鳥神社祭礼行事 f-5